

## 授業評価と保育所保育実習との関係についての予備的研究

— 授業「乳児保育Ⅱ」の改善のために —

石橋 由美・三好 年江

教育学

A Preliminary Study of the Relationships between Course Evaluations and Practice of Caring in Day Care Centers:  
To Improve the Course Content and Teaching Method in a Seminar "Care for Infants and Toddlers II"

Yumi ISHIBASHI Toshie MIYOSHI

(2004年11月10日受理)

本研究では、演習「乳児保育Ⅱ」の授業評価と乳児保育実習との関係を検討した。授業評価として、授業担当者は複数の評価方法で学生アウトカム評価を行い、学生は授業評価を行った。乳児保育実習をした学生の88%がこの授業に満足しており、「A」評価を受ける学生が乳児保育実習をしなかった学生より多かった。実習体験が授業で学んだ知識・理解と技能・実践力をより深めることが示された。

### 1. はじめに

授業の評価は、学習を促進し、教育改善に資するとともに、教育の説明責任を果たすために行われるべきものである。本研究では授業の評価として、授業担当者による学生アウトカム評価と学生による授業評価とをとりあげる。学生アウトカム評価とは、提供された学習機会を通じて学生が何をどの程度できるようになったか（到達度）を評価するものである（坂越2004）。

保育実習は、講義や演習など他の授業で学生が得た知識・理解と技能・実践力を、保育実践の様々な文脈に応用して総合的な保育実践能力を体験的に身につける機会である。保育実習体験を通ずことで、学生が他の授業で得た知識・理解を深め、総合的な能力をつけていくことが期待される。

本研究では、「乳児保育Ⅱ」の授業評価として、授業担当者による学生アウトカム評価と学生による授業評価を行い、1) 授業担当者による学生ア

ウトカム評価と乳児保育実習との関係、2) 学生による授業評価と乳児保育実習との関係を検討する。それらの結果に基づいて、「乳児保育Ⅱ」の授業実施上の問題点・改善点を検討する。

### 2. 方法

#### (1) 授業「乳児保育Ⅱ」の概要

乳児保育とは、0歳児（産休明け（57日）以降）、1歳児、2歳児を対象にした保育所保育（3歳未満児保育）のことである。授業「乳児保育Ⅱ」（演習：1単位、選択必修）は、保育士養成課程の「保育の内容と方法の理解に関する科目」で、2年次前期に開講されている。この科目に先行して、1年次に「乳児保育Ⅰ」（演習：2単位、必修）が1年間開講されている。「乳児保育Ⅱ」の授業期間は4月1日～8月13日であった。保育所保育実習は、1年次の10月に10日間（「保育実習Ⅰ」必修）と、2年次の7月前半に10日間（「保育実習Ⅱ」選択必

修)、他の授業を中断して実施された。

授業の目的：乳児保育の今日的課題、乳児保育実践に求められる保育士の役割と資質について学ぶ。

内容と方法：授業担当者は本研究の執筆者2名であった。授業の内容は、7月の乳児保育実習とのつながりを意識して、乳児保育の指導計画を中心に計画した。また、乳児保育についての知識・理解だけでなく、技能・実践力をつけるために、グループ・ワークを課し、授業で発表させた。

グループ・ワークの課題は、a.「現代社会と子育て支援」(授業1コマ分)、b.「乳児保育の保育計画・指導計画と保育記録」(授業6コマ分)、c.「乳児の遊びとその環境構成」(授業2コマ分)、d.「乳児保育実践記録の分析」(授業3コマ分)であった。いずれかの課題をグループで研究させ、各授業で1グループずつ発表させた。ただしb.の1コマでは、全員にそれぞれ作成させた乳児保育指導案(全日)の改善点を全員で検討した。残りの2コマは、「授業のガイダンス、まとめ、テスト」であった。

授業の流れはおおよそ、グループ研究のプレゼンテーション(40分)と質問(20分)、質問への回答と研究報告書を次回授業で行い(20分)、授業担当者も適宜質問と補足説明を行った。

#### (2) 授業担当者による学生アウトカム評価の方法 (知識・理解と技能・実践力)

1) グループ発表(30点)、2) 乳児保育指導案(20点)、3) 個人レポート(30点)、4) テスト(20点)、5) 欠席(1回につきマイナス2点)を合計し、80以上100以下を「A」、70以上80未満を「B」、60以上70未満を「C」、60未満を「D」とした。個人レポートは、授業に関連したテーマを自由に設定させて2000字以上で作成させた。テストは「保育所保育指針」の乳児保育にかんする知識・理解を問う内容であった。

#### (3) 学生による授業評価の方法

新見公立短期大学所定の授業評価用紙を使用した。評価項目は、「学生の授業への取り組み方」(7項目)、「授業・教員についての評価」(12項目)、「総合評価」(1項目)から成っている。その他に乳児保育実習体験の有無を回答させた。学生には無

記名で回答させ、学生代表に回収させ学務係に提出させた。

#### (4) 「乳児保育Ⅱ」と「乳児保育実習」体験との関係についての分析方法

「乳児保育Ⅱ」は選択科目であるが、学科として学生全員が履修するよう指導している。履修者は52名全員であった。

「保育実習Ⅱ」の受講者は41名で、残り11名は福祉施設実習「保育実習Ⅲ」を受講した。「保育実習Ⅱ」で乳児保育実習を行った24名を乳児保育「実習群」とし、幼児保育実習をおこなった17名と「保育実習Ⅲ」を受講し施設実習を行った11名を合わせて乳児保育「非実習群」(計28名)とし、「授業担当者による学生アウトカム評価」と「学生による授業評価」について両群を比較した。

また、乳児保育実習を体験した学生に、授業「乳児保育Ⅱ」の改善のために授業と実習との関係について質問紙調査を実施することを説明し、協力を求めた。質問項目は、1) 実習で大変であったこと、2) 実習前に準備したこと、3) 準備しておけばよかったこと、4) 授業「乳児保育Ⅱ」で実習に役立ったこと、5) 将来役立つこと、6) 次年度の授業に取り入れたらよいと思うことで、最終授業でそれぞれ自由記述させた。

### 3. 結果と考察

#### (1) 授業担当者による学生アウトカム評価： 学生は何を学んだか

##### 1) グループ発表の分析

各グループは限られた時間で資料を集め、よく準備していた。しかし発表で提示された資料が多すぎて、内容をまとめきれていないようであった。そのため発表を聞いた側の学生は、内容を充分理解して質問することができなかったと思われる。資料が膨大になる場合には、事前に配布し読んできてもらうようにするなど工夫が必要である。

グループ・ワークと発表で学ぶことは、「知識・理解」だけでなく、課題を追求し、発表する「技能・実践力」である。たとえば、自ら興味関心を持って主体的に新しい知識を見につけること、グ

ループ活動のリーダーシップとフォロアーシップ、他者に教えるためのコミュニケーション力やプレゼンテーション力などの能力である。今後の授業では、たとえばプレゼンテーション能力を育てるためには、プレゼンテーションの内容（研究課題の理解、方法、結果の理解）と技術（わかりやすい資料の準備、説明、質疑応答）についての、授業担当者と学生自身による評価の導入などを検討する必要がある（英,2004）。

## 2) 乳児保育指導案（全日）の作成

学生が作成した指導案は、「ねらい」（～遊びを楽しむ）を実現するための保育士の援助と配慮が書かれていないものが多かった。授業担当者は、「ねらい—子どもの姿—保育士の援助と配慮」をつなげること、導入が保育の流れにそっているか、などについて考えるよう学生を指導した。

## 3) レポートの分析

最終授業後、学生に「乳児保育の授業を通して興味を持ったこと」についてレポートを作成・提出させた。このレポートのテーマは各自自由とした。このレポート内容の分析は、授業で学生が学んだ知識・理解と技能・実践力を応用する総合的能力や学生の興味を読み取る一つの指標となると考えられる。また、今後の授業改善にも何らかの示唆を与えてくれるであろう。

各自自由に選んだテーマであるが、52人中35人つまり、約7割の学生がグループで発表したテーマをさらに追求するという傾向が見られた。その理由としては、「グループで発表したけどもっと詳しく調べてみたかった」というものがもっとも多く、発表やその準備のために調べ学習をしたことが直接、その後の学習意欲を高めていることが分かる。また、「（授業で）調べたが、時間がなく深く調べることができなかった」「発表の内容に偏りがあり環境構成についてもう少し調べたかった」「調べたが、実際にイメージすることが難しかった」というようなグループワークで消化不良の部分を補いたいという動機から、更に学習を深めようとする学生もみられた。この場合、最後のレポート提出で再度、学習ができ、それを深めることができたとするれば、このレポート作成・提出は学生アウトカム評価の資料として大きな意味があるといえよう。

また、現在のカリキュラムでは、学生が十分に自己学習（研究）をする時間が取れないことを示しているともいえよう。

次に学生の記述からグループ研究発表後と、レポート提出時における学びの変化について分析していくことにする。

学生Aはグループ発表後、「指導計画は家庭との連携を大切にしながらしていることが分かった。あくまでも保育園は家庭と同じようにということを念頭に置いて、現代の社会の背景を考えながら立てられていたことがわかった」と感想を記述している。さらにレポートでも同じテーマを設定し、指導計画を自分なりに分析した結果、「指導計画を立てる上で重要なこととして挙げられているのは、全て子どもの最善の利益を考慮してのことであることに改めて気付いた。自分なりに調べてよかった」と、新しい学びを展開している。

学生Bは、「保育記録の必要性」についてレポートをまとめている。グループ発表後の感想では、「指導計画を作成する上で個人別の保育記録や発達の記録や家庭との連絡帳などといった記録は欠かせないもので、指導計画を作成する上で記録は欠かせないという感想にとどまっていた。その後、実習で記録に苦労したことを契機に、乳児保育の授業と実習とを結びつけ、「記録の必要性や意味について確認したい」という理由から自分なりに記録について調べている。レポートでは「保育記録の必要性を再確認した」と述べ、「保育者自身が自分の保育を振り返り反省することにより、子どもたちへの保育内容を充実させることにつながっていることが改めてわかった」とまとめている。このレポートでは授業の発表では触れられていなかった部分に気付いており、学びの深まりが見られる。

学生Cは、グループ発表で遊びと環境について調べてみて「遊びと発達の関係に驚いた」という感想を述べている。そこで、0歳児の環境構成に興味を持ち、以前から興味があったシュタイナー理論とそれとを結びつけて考察していこうと試みている。その結果、「幼ければ幼いほど感覚に敏感であり、保育者はゆったりと構え、乳児に接することが大切である」ということなど、乳児にとって

大切なことを導き出している。ただこのレポートでも十分な考察には至らなかったため、シュタイナーの考えに基づく環境構成が0歳児にとってどのような効果・意味があるのか詳しく調べたいと、今後の課題へとつなげている。

「乳児保育Ⅱ」ではグループで課題を研究し、全体に向けて発表という演習形態の授業を試みた。さらに授業で得た関心を追求させるために、授業終了後レポートを作成させた。レポートを分析した結果、学生が興味を持ち自分から調べたことについては学びが大きいと考えられた。ただ、この学びにも個人差があり、なかには授業の発表内容を再確認する程度のもも見られた。

#### 4) 授業「乳児保育Ⅱ」と「乳児保育実習」との関係についての質問紙調査

乳児保育実習をした学生24名のうち、「夏の乳児の遊びについてもっと調べておけばよかった」(15名)という記述が多くみられた。授業で実習に役立ったことは「指導案の作成」(12名)と「遊び」(10名)、将来役立ちそうなことは「指導案の作成」(16名)と「乳児保育実践記録の分析」(4名)であった。その他、授業のなかで子どもの姿や保育実践を具体的にイメージできるようにしてほしいという要望もあった。この調査結果から、乳児保育実習をした学生は、授業で学習した「指導計画の作成」についての知識・理解と技能・実践力を実習で応用し、総合的能力を深めたことが伺える。「乳児の遊び」についても同様のことが伺えるが、授業のなかでもっと充実させたいという要望がある。本学科の教育課程には「児童文化」の科目がないので、他の「保育の内容と方法の理解に関する科目」で乳幼児の遊び文化についてもっと取り上げる必要があると思われる。「乳児保育実践記録の分析」では、保育実践における子ども理解と保育者の関わりの視点について学ばせたかったが、充分ではなかったようである。授業で使う実践記録の精選とその目的、検討の仕方を明確にする必要がある。

#### 5) 授業担当者による学生アウトカム評価と乳児保育実習との関係

学生アウトカム評価の得点(グループ発表、乳児保育指導案、個人レポート、テスト、欠席、合

計点)について、実習群と非実習群の平均値を比較したところ、統計的に有意な差は得られなかった。「A」評価を受けた学生と「B」「C」評価を受けた学生の人数を両群で比較したところ有意な連関が得られた(表1参照)。すなわち、乳児保育実習をした学生は、「A」評価(合計80点以上)を受ける学生が多く、実習体験が授業「乳児保育Ⅱ」の知識・理解と技能・実践力をより深めることにつながっていることが示唆された。

#### (2) 学生による授業評価

乳児保育実習経験の有無に回答していなかった2名を除外して、残り50名について分析した。

##### 1) 授業に対する学生の取り組み方

表2に学生の授業への取り組み方についての自己評価結果が示されている。ほとんどの学生が「授業にきちんと出席し」(項目1)、「課題をきちんと提出した」(項目5)と回答した。第1回授業でシラバス見せながら説明しているにもかかわらず、「シラバスを事前に読んだ」と回答したのは、「非常にあてはまる」と「まあまああてはまる」を合わせて約半数であった。学生はシラバスを意識していないのかもしれない。あるいは「事前に」を「第1回授業の前に」と理解したのかもしれない。この項目は「シラバスを読んだか」を質問するだけでよいのではないと思われる。

「予習をした」学生(項目3)は40%、「復習をするようにした」学生(項目4)は26%で、授業の予習・復習をする学生が少ない。5時間目まで授業があるので予習・復習に十分な時間をとれないのが現状であろう。学生に予習・復習をさせるには、宿題などの課題を与える必要がある。これらの質問項目は、「予習・復習・宿題や関連した学習時間」の授業1コマ当たりの平均で回答させた方がより具体的な実態をつかめるであろう。

「私語などをせず集中して授業を受けた」学生(項目6)は44%で、「教員に質問した」学生(項目7)は50%であった。約半数の学生しか授業に積極的に参加していないと思われる。

##### 2) 授業および教員について

表3に授業と教員に対する学生による評価が示されている。「この授業を受けて良かった」と満足

表1 乳児保育実習をした学生としなかった学生の「乳児保育II」アウトカム評価

学生アウトカム評価( $\chi^2(1)=6.031, p<.05$ )			
	A	BとC	合計
実習群	15(62.5%)	9(37.5%)	24(100.00%)
非実習群	8(28.6%)	20(71.4%)	28(100.00%)

注：数値は人数、( )：構成比。

表2 授業「乳児保育II」に対する学生の取り組み方についての学生自身による評価

	非常にあ てはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	全くあては まらない	計
1.授業にきちんと出席 した	37 (74.00%)	12 (24.00%)	1 (2.00%)			50 (100.00%)
2.シラバスを事前に読ん だ	13 (26.00%)	13 (26.00%)	16 (32.00%)	3 (6.00%)	5 (10.00%)	50 (100.00%)
3.予習をして授業に臨 んだ	4 (8.00%)	16 (32.00%)	13 (26.00%)	12 (24.00%)	5 (10.00%)	50 (100.00%)
4.授業のあとに復習を するようにした	3 (6.00%)	10 (20.00%)	17 (34.00%)	12 (24.00%)	8 (16.00%)	50 (100.00%)
5.課題をきちんと提出 した	39 (78.00%)	10 (20.00%)	1 (2.00%)			50 (100.00%)
6.私語などをせず集中 して授業を受けた	6 (12.00%)	16 (32.00%)	13 (26.00%)	13 (26.00%)	2 (4.00%)	50 (100.00%)
7.わからないことにつ いて教員に質問した	13 (26.00%)	12 (24.00%)	18 (36.00%)	5 (10.00%)	2 (4.00%)	50 (100.00%)

注：数値は人数、( )：構成比。

している学生(項目20)は、「非常に」と「まあまあ」を合わせて82%であった。しかし「教室内が学習にふさわしい雰囲気だった」(項目12)と回答した学生は42%、「授業の進む速さが適切である」(項目16)と回答したのは60%であった。その他の項目は7、8割の学生が肯定的に評価していた。

「総合的に見て高く評価できる」(項目21)は、項目15、16、18との間に有意ではあるが低い相関が得られただけで(それぞれ $r=.281, r=.334, r=.305$ )、その他の項目との間には有意な相関が得られなかった。また記入漏れが11名いた。この項目の意味内容もあいまいで授業改善に結びつけにくいので、削除した方が良いように思われる。

### 3) 学生による授業評価と乳児保育実習との関係

乳児保育実習を経験した学生(実習群)の約半

数は、授業「乳児保育II」の復習をするようにしたと回答し、この人数は乳児保育実習を体験しなかった学生(非実習群)より有意に多い(表4参照)。

また、実習群は、非実習群よりも授業と教員に対して肯定的に評価する傾向が見られた(表5参照)。「この授業を受けて良かった」と満足している学生(項目20)は、「非常に」と「まあまあ」を合わせて、実習群で88%、非実習群で76%であった。「教室内が学習にふさわしい雰囲気だった」(項目12)と回答した学生は、実習群で62%、非実習群で23%であった。「授業の進む速さが適切である」(項目16)と回答したのは、実習群で79%、非実習群で42%であった。

これらの結果から、乳児保育実習を体験した学

表3 授業「乳児保育II」と教員に対する学生による評価

	非常にあ てはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	全くあては まらない	計
8.教員から授業への意 欲・熱意が感じられた	25 (50.00%)	19 (38.00%)	6 (12.00%)			50 (100.00%)
9.授業のねらいは明確 であった	22 (44.00%)	17 (34.00%)	8 (16.00%)	2 (4.00%)	1 (2.00%)	50 (100.00%)
10.シラバスに沿って授 業が行われた	15 (30.00%)	18 (36.00%)	13 (26.00%)	4 (8.00%)		50 (100.00%)
11.教員は十分準備し て授業に臨んでいた	17 (34.00%)	24 (48.00%)	8 (16.00%)		1 (2.00%)	50 (100.00%)
12.教室内は学習にふ さわしい雰囲気だった	6 (12.00%)	15 (30.00%)	23 (46.00%)	4 (8.00%)	2 (4.00%)	50 (100.00%)
13.教材(教科書・配布 資料等)は適切だった	16 (32.65%)	20 (40.82%)	13 (26.53%)			49 (100.00%)
14.受講するうちにこの 教科目に対する理解 が深まった	18 (36.00%)	20 (40.00%)	11 (22.00%)	1 (2.00%)		50 (100.00%)
15.受講するうちにこの 教科目に対する興味・ 関心が深まった	19 (38.00%)	18 (36.00%)	12 (24.00%)	1 (2.00%)		50 (100.00%)
16.授業の進む速さは 適切である	15 (30.00%)	15 (30.00%)	17 (34.00%)	3 (6.00%)		50 (100.00%)
17.教員の声の大きさ、 速さ、聞き取りやすさ などの話し方は適切で あった	14 (28.00%)	22 (44.00%)	10 (20.00%)	4 (8.00%)		50 (100.00%)
18.板書や視聴覚教材 の利用の仕方は適切 であった	11 (22.00%)	13 (26.00%)	25 (50.00%)	1 (2.00%)		50 (100.00%)
19.教員は学生の授業 に対する質問や相談 に応じてくれた	23 (46.00%)	16 (32.00%)	11 (22.00%)			50 (100.00%)
20.この授業を受けて 良かったと思った	18 (36.00%)	23 (46.00%)	8 (16.00%)	1 (2.00%)		50 (100.00%)
21.この授業は総合的 に見て高く評価できる	12 (30.77%)	18 (46.15%)	7 (17.95%)	2 (5.13%)		39 (100.00%)

注：数値は人数、( ): 構成比。

表4 乳児保育実習をした学生（実習群）としなかった学生（非実習群）による、授業「乳児保育Ⅱ」に対する学生の取り組み方についての評価

4.授業のあとに復習をするようにした( $\chi^2(2)=9.436, p<.01$ )						
	非常に あてはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	計
実習群	1 (4.17%)	10 (41.67%)	6 (25.00%)	5 (20.83%)	2 (8.33%)	24 (100.00%)
非実習群	2 (7.69%)		11 (42.31%)	7 (26.92%)	6 (23.08%)	26 (100.00%)

注1：数値は人数、（）：構成比。注2： $\chi^2$ 検定では、項目4は「非常にあてはまる+まあまああてはまる」と「あまりあてはまらない+全くあてはまらない」を合併した。

生は、授業「乳児保育Ⅱ」での学びを積極的に深めたと考える、他方、乳児保育実習を経験しなかった学生は、授業への参加も消極的で、授業の学びを深める機会をもてなかったと考えられる。

### (3) 総合的考察

#### 1) 学生アウトカム評価の方法

精緻化された標準テストでは測定しきれない技能の評価は、1) 口述発表や模擬授業のように、実生活で必要となるパフォーマンスを評価する、2) 創造性や感受性など、数値化によって捨象されてしまう質的局面を多様な方法を用いて評価する、3) 個々の教育機関の目的に応じた評価を心がける、4) 学習過程において実際に生み出されたものを評価することが望ましいとして、人間が様々な能力を駆使して活動していることを考えれば、複数の評価法を用いて多面的な評価を試みる事が授業の質の保証につながると坂越(2004)は指摘している。

「乳児保育Ⅱ」では、グループで課題を研究・調査し、授業で発表するという演習形態の授業を試み、1) グループ発表、2) 乳児保育指導案、3) 個人レポート、4) テスト(20点)、5) 欠席(1回につきマイナス2点)という複数の評価法を用い、多面的な評価を試みた。授業の改善点として、グループ発表については、プレゼンテーションの内容と技術の評価方法を検討する必要性が示唆された。

#### 2) 授業評価と乳児保育実習体験との関係

乳児保育実習体験は、「乳児保育Ⅱ」で得た知識・理解と技能・実践力を、乳児保育実践の多様な文脈に応用して総合的能力をつけ、また授業での学びを深めるのに役立っていると思われる。「乳児保育Ⅱ」だけでなく、他の専門科目においても、授業での学びを保育実習につなげていけるような指導の工夫が必要であると感じた。

#### 3) 授業「乳児保育Ⅱ」実施上の問題点と改善点

「乳児保育Ⅱ」では、グループワークを課して、授業で発表させた。グループワークや発表、乳児保育実習など体験を通すことで理解が深まり、他者に教えることで周辺も含めた深い理解が行われることが期待される(英,2004)。しかし乳児保育実習を体験しなかった学生に対しては十分な教育効果は得られなかった。乳児保育実習体験のない学生は、授業に積極的に参加し、私語をせずに授業に集中していたのは約半数しかおらず、22%しか教室には学習にふさわしい雰囲気だと感じていなかった。

授業でのグループ発表の内容と技術を改善することが授業改善の課題である。そのためにプレゼンテーション評価の導入が考えられる。わかりやすく資料を提示し説明できれば、発表を聞く学生の理解を容易にし、「質問力」をつけることも可能になるであろう。

演習形態の授業を効果的に行うためには、学生の学習時間の確保と図書館の利用時間など学習環境の整備が必要である。学生の学習時間を確保す

表5 乳児保育実習をした学生（実習群）としなかった学生（非実習群）による、授業「乳児保育II」と教員に対する評価

	非常に あてはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	計
8.教員から授業への意欲・熱意が感じられた( $\chi^2(1)=11.538, p<.01$ )						
実習群	18 (75.00%)	4 (16.67%)	2 (8.33%)			24 (100.00%)
非実習群	7 (26.92%)	15 (57.69%)	4 (15.38%)			26 (100.00%)
9.授業のねらいは明確であった( $\chi^2(2)=9.636, p<.01$ )						
実習群	16 (66.67%)	5 (20.83%)	1 (4.17%)	2 (8.33%)		24 (100.00%)
非実習群	6 (23.08%)	12 (46.15%)	7 (26.92%)		1 (3.85%)	26 (100.00%)
11.教員は十分準備して授業に臨んでいた( $\chi^2(2)=8.977, p<.05$ )						
実習群	13 (54.17%)	9 (37.50%)	2 (8.33%)			24 (100.00%)
非実習群	4 (15.38%)	15 (57.69%)	6 (23.08%)		1 (3.85%)	26 (100.00%)
12.教室内は学習にふさわしい雰囲気だった( $\chi^2(1)=7.962, p<.01$ )						
実習群	5 (20.83%)	10 (41.67%)	7 (29.17%)	1 (4.17%)	1 (4.17%)	24 (100.00%)
非実習群	1 (3.85%)	5 (19.23%)	16 (61.54%)	3 (11.54%)	1 (3.85%)	26 (100.00%)
14.受講するうちにこの教科目に対する理解が深まった( $\chi^2(2)=10.292, p<.01$ )						
実習群	14 (58.33%)	7 (29.17%)	3 (12.50%)			24 (100.00%)
非実習群	4 (15.38%)	13 (50.00%)	8 (30.77%)	1 (3.85%)		26 (100.00%)
15.受講するうちにこの教科目に対する興味・関心が深まった( $\chi^2(2)=13.430, p<.01$ )						
実習群	15 (62.50%)	7 (29.17%)	2 (8.33%)			24 (100.00%)
非実習群	4 (15.38%)	11 (42.31%)	10 (38.46%)	1 (3.85%)		26 (100.00%)

注1：数値は人数、( )：構成比。注2： $\chi^2$ 検定では、項目8は「まあまああてはまる+どちらともいえない」を、項目9,11,14,15は「どちらともいえない+あまりあてはまらない+全くあてはまらない」を、項目12は「非常にあてはまる+まあまああてはまる」と「どちらともいえない+あまりあてはまらない+全くあてはまらない」を合併した。



表5 (つづき)

	非常に あてはまる	まあまあ あてはまる	どちらとも いえない	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	計
16.授業の進む速さは適切である( $\chi^2(2)=8.267, p<.05$ )						
実習群	11 (45.83%)	8 (33.33%)	3 (12.50%)	2 (8.33%)		24 (100.00%)
非実習群	4 (15.38%)	7 (26.92%)	14 (53.85%)	1 (3.85%)		26 (100.00%)
17.教員の声の大きさ、速さ、聞き取りやすさなどの話し方は適切であった( $\chi^2(2)=11.133, p<.01$ )						
実習群	12 (50.00%)	7 (29.17%)	3 (12.50%)	2 (8.33%)		24 (100.00%)
非実習群	2 (7.69%)	15 (57.69%)	7 (26.92%)	2 (7.69%)		26 (100.00%)
19.教員は学生の授業に対する質問や相談に応じてくれた( $\chi^2(2)=7.977, p<.05$ )						
実習群	16 (66.67%)	5 (20.83%)	3 (12.50%)			24 (100.00%)
非実習群	7 (26.92%)	11 (42.31%)	8 (30.77%)			26 (100.00%)
20.この授業を受けて良かったと思った( $\chi^2(2)=10.013, p<.01$ )						
実習群	14 (58.33%)	7 (29.17%)	3 (12.50%)			24 (100.00%)
非実習群	4 (15.38%)	16 (61.54%)	5 (19.23%)	1 (3.85%)		26 (100.00%)
21.この授業は総合的に見て高く評価できる( $\chi^2(2)=7.424, p<.05$ )						
実習群	10 (41.67%)	6 (25.00%)	4 (16.67%)			20 (100.00%)
非実習群	2 (7.69%)	12 (46.15%)	3 (11.54%)	2 (7.69%)		19 (100.00%)

注1：数値は人数、( )：構成比。注2： $\chi^2$ 検定では、項目16,17,20,21は「どちらともいえない+あまりあてはまらない+全くあてはまらない」を合併した。

るためには、保育士養成を目的とする短期大学で見つけておくべき属性と能力を明確にしたうえで、その目標に到達させるためのより効果的な教育課程の編成を工夫する必要があると思われる。

参考文献

英 崇夫 2004 プレゼンテーション評価で身につく力。IDE大学セミナー・シンポジウムⅡ配布資料(2004/08/25)。

坂越正樹 2004 担当授業の質的保証はどこまで可 中心に。 IDE大学セミナー・シンポジウムⅡ配  
能か： 学生アウトカム評価（到達度評価）を 布資料（2004/08/25）。

### **Summary**

In this study, we examined the relationships between the course evaluations in a seminar “Care for Infants and Toddlers Ⅱ” and the practice of caring for them in Day Care Centers. For the course evaluations, the teachers evaluated the students’ outcomes with plural assessment methods and the students evaluated this course. Eighty-eight percent of the students who experienced the practice of caring for infants and toddlers were satisfied with this course, and more students got the Evaluation “A” than those who didn’t. It was shown that the practice of caring enhanced the knowledge/understanding and skills/performances of students in this seminar.